

ワークシート①

～違いを認め合い、活かすあうために～

1

物語の前半と後半で、直也に対するちひろの考え方が変わりました。
どのように変わったと思いますか？

前半

後半



2

ちひろの考え方が変わったのはなぜだと思いますか？

3

あなたの学校や職場に直也や乾のような人が入って来たら、どのように行動しますか？

4

映画を見て感じたこと、気づいたことを自由に記述して下さい。

質問

この作品の内容に関する以下の事柄について、「そう思う」場合は「○」、「そう思わない」場合は「×」、わからない場合は「△」をつけて、自分の思いを確認してみましょう。

- () ちひろが直也にいら立つ気持ちがわかる
- () 自分も直也のようなところがある
- () 地域や職場で、乾のような孤立感を感じたことがある
- () 直也の母親や父親の気持ちがわかる
- () 「常識的には」「普通は」という言葉が気になる
- () 気難しい人には近づかないようにしている
- () 職場に直也や乾のようなタイプの人がいたら困る
- () 自分は周りの人と十分にコミュニケーションを取れている
- () 障害のある人と、どう接していいかわからない
- () 自分が他の人と「違う」ところをいくつか挙げられる

映画を見て感じたこと、気づいたことを自由に記述して下さい。





大切なことは目には見えない

北九州市人権啓発映画制作に関する検討会議委員長 中島 俊介
(北九州市立大学 地域創生学群教授)

「声なき声、姿なき姿を求めよ。人権は見えず、聴こえず」私の大切にしていることばです。この映画では「目に見えにくい障害」が描かれています。難病や内部疾患、発達障害などは一見してわからない。主人公の直也は先天性の発達障害の一種・アスペルガー症候群。常識的な会話のやり取りが困難です。「君は子どもか」と注意されたのに「いえ、25歳です。子どもではありません」と答えています。当然想像できるはずの会話の文脈がわからないのは、コミュニケーション力や想像力の欠如があるためです。そんな直也は「変わった人」と言われ、普通の人と「ちがう」とされてしまいます。この「ちがう」を辞書でひくと、「異なる」に加え、英語にはない「間違う」の意味もあります。日本では個人より全体を重んじてきた結果、ちがうものを「正しくない」と排除する風土が形成されてきたとはいえないでしょうか。

21世紀のキーワードの一つに「多様性」=ダイバーシティが挙げられます。ダイバーシティとは、企業や組織で使われている積極的多様性のことで、一人ひとりが持つ違いや共通点を認め合い、それを活かすことで組織が活性化するという考え方です。映画の中での小柳ホーム長の言葉「人間もジグソーパズルみたいですね。同じように見えても、一人ひとり違う。違うからこそ、組み合わせると面白い」「異なるものは間違いであるから排除する」のではなく、「異なるものと共生すると幸せになる」つまり「存在をありのままに認め合う文化」を推進したいものです。目に見えにくい障害の一つである聴覚障害の妻と歩んできた乾は直也のハンディーをいち早く見抜きます。映画を観終えた私は、サン=テグジュペリの名作『星の王子さま』の「大切なことは目には見えない」ということばを思い出しました。この映画で示された「目に見えにくい障害」を前にして、問われているのは私たち自身の人権をはじめとする大切なものへの「想像力の欠如」ではないでしょうか。



北九州市人権推進センター 人権文化推進課

TEL (093) 562-5010

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町 11-4 大手町ビル (ムーブ) 8階